

昭和十二年七月七日は、日支兩國民にとつて永久に忘れ得ざる記念日である。蘆溝橋畔、一發の銃聲によつて、東亞の歴史は新しき世紀へ大いなる轉換の發足を始めたのである。

滔々たる濁流に橋脚を洗ひながら、永定河の上に支那興亡の夢を乗せて、白い虹の橋を架けたやうなこの蘆溝橋が、こんな大きな事變を生み出さうとは、誰が以前に知り得たらう。河岸に立てる『蘆溝曉月』の碑。燕京八景の一として、帝王の杖を引き給ひし名勝の地は、はしなくも歴史の改變者として世界の耳目を聳動せしむる世紀の地となつたのである。

事變突發の日は私は天津傳道廳にゐた。六月十五日から工を起された傳道廳新築工事の監督者として七月一日から十五日までが私の當番の期間であつた。それ故、私は六月末日から傳道廳へ行つてゐた。

八日の朝、私は新聞を覗いて愕然とした。

蘆溝橋附近にて日支兩軍衝突す。北京の各城門閉鎖され、交通全く杜絶す。北京在留邦人二千數百名の生命、今や正に風前の灯のごとし。

私には北京城内の混亂状態が臉の裏にはつきり映つてくる。私はすぐ受話機を握つて北京へ長途電話を申し込んだ。私は妻に北京の様子を尋ね、最悪の場合の處置方法を連絡して置きたかつた。私は不安と焦燥に電話を待つたが夜に入つても通話の通知がなかつた。

私は決心した。

私の今の使命は、神から仰せ附かつた工事の監督にある。七月十五日までは事變が如何に推移しようが、私は私の任務から離れるまい。私の神命による任務遂行により、神は最善を盡して必ず北京をお守り下さるに違ひなからう。私は神前に跪いて、不安と焦燥を祈りに變へて神に誓つた。

二日目も、三日目も朝から長途電話を申し込んで見たが途中で電線破損にて、通話不能と局から断つて来た。

四日目の新聞には北京と天津の中間、廊坊附近で日支兩軍の激戦のあつたことを報道してゐた。電話不通も多分このためだらうと思へた。しかし毎日根氣よく北京への至急電話を申し込んだ。何時か通じてくれる日があらうと思つて。

事件は日軍の現地解決、不擴大主義にもかゝはらず、支那側の挑戦に局部的衝突が屢發してゐた。北京への鐵道も途中で破壊され、列車は不通になつてしまつた。天津と北京の連絡は全く断たれて、北京は袋の鼠となつてしまつた。

私の不安も焦燥も今は全く甲斐なきものとなつてしまつた。私は最後の決心をした。

當時天津傳道廳では、藤橋廳長は御歸國中であり、書記梶本先生が一切の責任を背負つて活動してをられた。

私は晝は工事に勤め、夜は廳に歸つて、本部への報告書を書いた。そして先生と相談して、北京の傳道者宛、至急に送金して頂くやうにした。

北京は各城門が閉鎖して、城外との交通が杜絶してゐるから籠城してゐるに違ひない。毎日銃砲聲に怯えた信者や生徒達は、教會へも學校へも行かなくなつてゐるだらう。その上、物資の缺乏を見越して、物價は激騰してゐるに違ひない。各傳道者が日子が経過するに従つて餓死線に押しやられて行く姿がまぎく見えた。届く、届かぬは第二として、とにかく彼等を餓より救つて行かなければならないと考へたのである。

傳道廳の若い人達が、各銀行に走つてくれたが、どの銀行も、電信、電話、郵便の不通で受附けてくれず、空しく金を持つて歸つて来た。

翌日も行つて貰つたが駄目。やつと三日目に朝鮮銀行に拜み倒して、金を押附けて歸つて来た。銀行では電信の復舊次第電報で送金はするが、何時北京へ到着

するか知れないから、その點は諒解してくれとのことであつた。

五日目に本部から電報が届いた。

教師信徒傳道廳ノ指揮ニ從ヒ、一手一ツノ活動セヨ

有難い電報である。がこれを北京のものに傳へる術もない。

その次の日はしなくも北京に電話が通じた。私は震へる手で受話機を握つた。

『モシ〜、北京ですか、モシ〜皆どうしてゐますか』

『皆無事です。今川様姉妹も當教會の方が地勢上安全ですから、此處に来て貰つてゐます。林様も毎日來て連絡を取つて下さつてゐます。皆無事で元氣です』

妻の聲である。

『市内は危険がありませんか』

『城門は皆閉り、外部との連絡が全く出来ません。市内は毎夕戒嚴令が布かれ、教會の附近は夕方から夜明けまで支那兵で一杯です。家の中に籠城してゐます』

『朝鮮銀行から電報爲替で、金を送りました。皆で分けて生活をつないで下さる』

『まだ銀行から送金の通知はありません。貴方歸つて貰へないでせうね。汽車がないから』

『毎日電話を申し込んで、今日やつと通じたんだよ。北京へは歸れない。最悪の場合は命に代へても御神體を守つてくれ。萬事よろしく頼む、モシ〜梶本先生と代るから』

『モシ〜、私梶本、皆元氣ですか。本部から、教師信徒一手一つになつて、時局活動をするやうにと電報がありましたから、列車の開通し次第、神様のお供をして天津に來て下さい。今日までどんなに心配したか知れないよ。皆に連絡して來て頂くやう傳へて下さい。もう何もありませんか。なければこれで失禮します』

やつと電話が通じた。皆無事、私は安堵の胸を撫で下した。

北京在住の大部の傳道者達は、神様のお供をして數名の婦女子信者と共に思ひ掛けなくも十四日夕刻傳道廳に到着した。妻もその中に加はつてゐた。私は部屋へ入つて挨拶する妻の言葉ももどかしく尋ねた。

『色々と心配したらう。皆無事で來られてよかつた。教會はどうして來た。莫様や張様はどうした』

『まあ緩りお話ししますからお待ちなさい。ア、喉が乾いた』

妻はさも美味さうに、立てつづけにお茶を四、五杯飲んだ。彼女の話はかうである。

毎月八日は當教會の月次祭の日である。七月八日、朝から祭典の準備をしてゐる。

ると、信徒總代の横山駿雄氏の宅から、電話が掛つて來た。妻が電話口に立つと『昨夜、蘆溝橋で日本軍と宋哲元の廿九軍が衝突して、今向をさまらず戦闘中である』と親切に傳へて下さつた。もう何度もの事變に相當肚を練られてゐるもの、聞けば胸の騒がぬ筈はない。だが午後二時からの祭典は目近に迫つてゐる。今騒いではならぬと妻は一人胸にをさめて、例月通りに祭典をすゝめた。祭典が終了し、信徒達はそれ／＼歸路についた。中に歸つた筈の四、五人の信者が舞ひ戻つて來た。彼等の家は皆内城の各門外にあるのだが、今はすでに城門が閉ざされて通行禁止であると傳へた。教會の役員連の顔がサツと曇つた。その夜から全市に戒嚴令が布かれ、城内の支那兵が辻々を警備し初め、外出は危険になつた。夜、窓を開けて寝てゐると、毎夜のやうに西の方から砲聲が聞えてくる。今夜も激戦が繰返されてゐるのかなあとと思ふと、心配でなかく／＼睡れない。

その中に戒嚴令が晝間から布かれ出し、信者も學生も、誰も教會へ來なくなつ

た。大街の十字路にはバリケードが構築され、北京全市はすつかり武装した。ことに夜間は、城内の支那兵が出勤して各要所々々を固め、當教會附近は交民巷へは佛國練兵場を一つ距てゝゐるに過ぎないため、前の大街は勿論、附近の中國人家の屋上には機關銃さへ据ゑて萬一を警戒してゐ、二階の窓を開けると、彼等の銃劍の音、軍靴の音、話し聲が手に取るやうに聞えて、夜もおちく／＼睡られなかつた。

時局が日一日と緊迫して來た。日本人が暗い胡同や中國人の密集地帯で彼等から暴害を加へられたり、不法拉致されたりする者が頻出して來たので、北京在住の傳道者は出来るだけ大使館の命令の届き易い當教會に避難して來て貰ふか、一日必ず一回、何かの方法で連絡を取つて貰ふことにした。やがて日本人居留地帯から、一番遠い今川様姉妹には我々の勧めで當教會に集合してもらつた。

所がそれから二日して、日本憲兵隊に勤めてゐる私の友人から電話が掛つて來た。

『あ、佐藤様の奥様ですか。あのね、お宅の教會注意して下さいね。

實は今月の抗日系の世界畫報に東單牌樓附近の日本人商店と共に、お宅の教會の寫眞が掲載され、精神的侵略を企圖し、中國民衆を惑はす阿片的日本宗教たる天理教を打倒すべし。と註解がつけてあるのですよ。ひよつとすると爆彈の三つや四つは見舞はれる覺悟をしてゐて下さい。危険事故が発生したら、即刻私に通知して下さい。飛んで参りますから、一寸お知らせします』

妻は蒼くなつた。だが何とも豫防の方法がない。折角今川様方に一寸でも安全であれかしと思つて來て頂いてゐたが、考へて見ると、彼女の傳道所より、自分の教會の方が、餘程危険率が多かつたのだ。

今川様二人にこの旨を話し、元々の彼女等の意志通りに傳道所を死守するた
め、間もなく歸つて貰つた。

民衆は今度は日本が負ける、日本が駄目だと喧傳してゐて、教會の婦女子が不安な氣持に怯え出した。

妻は教會で朝夕命を結び合つてゐる役員の家族八名を、自分の命に換へても守つてやらねばならぬと決心した。早晚訪れて来る支那兵闖入の日、慌てゝ逃げ場を失つては、と思ひ悩んだ。そして、彼處此處と考へあぐんだ上、思ひ當つたのは教祖殿の床下である。それは、生きるも死ぬも命は御教祖様にお任せしよう。たとへ殺されても教祖様と一緒に、と考へたからである。早速命じて疊を上げさせたが、板床が堅く釘附けになつてゐて開きさうにない。斧と鋸でやつと身體の入るだけの穴を開けて見た。が、考へて見るとそれは餘りにも消極的な子供っぽい考へである。たとへ皆がこの中へ身を潜められても、暗闇に恐怖する小さい子供に泣かれては、どんなに親達が隠れようとしても駄目だと氣付き、色々考へ續けたが、結局、かうなつては、まだ危険性の少いそれぐの親の家に一時避難

させた方がいゝと思つて、手廻品を持たせて歸した。さうして教會には妻及莫張二人の役員と厨子と僕役の五名が残ることになつた。

市内の空氣が日一日と險惡になつてくると、教會の役員達も不安な氣持にかられて来る。彼等は妻に、

『今度の事變は、今迄の事變と違ひます。民衆が日本敗ると騒いでゐます。これ以上戦局が擴大したら、今度は必ず市内で衝突が起ります。その時奥様どうなされますか。衆は寡に敵しません。支那軍の慘虐の及に斃れるよりは奥様どうか先に逃げて下さい』

『いえ、貴方方だつて教會に居る以上、同じ危険の橋に立つてゐるのです。華人傳道には貴方方ではなくてはならん重要な人達です。貴方方二人が力を合はせて奮闘して下さつたら必ず神様のお望みがこの中國で實現します。命を長らへなければならぬのは貴方達です。莫様はお母様の所にお歸りなさい。張様は昌平縣

の田舎へお歸りなさい。教會は私一人が守りますから』

『いゝえ、私達は歸りません。私達だつたら何とかいひ逃れが出来ますが、奥様はどんなに中國語がお上手でも日本人ですから駄目です。その上、支那の兵隊は日本の兵隊とは違ひます。ことに女と見れば必ず食指を動かして、女を臺なしにして殺してしまひます。奥様こそ何處かに避難して下さい』

『いゝえ、私は會長から儂の留守中一切を頼むといはれました。會長の命令がな以上、一步もこの教會から動くことは出来ません』

待つ日本軍は中々入城してくれない。三人は毎日押し問答を續けた。

妻は二人に向つて、

『今日になつても、日本の援軍がまだ入城しません。私達は支那兵の闖入を免れないものと覺悟せなければなりません。さうなれば私の一命を捨てるのはいと易いことですが、貴方方まで漢奸として、同じ運命に悲劫の最後を遂げなければならぬ』

らないことは私が忍べません。だから逃げられる今の間にそれごとく逃げて下さい』といふが二人は聞かない。

『支那兵が侵入するとすれば、奥様こそ危険です。私はかう思ふのです。卑怯な方法が知れませんが、一時教會から一切の日本の色彩を消して中國の寺廟のやうに偽装し、私達が僧侶だと誤魔化せば、彼等の兇手から教會を守ることが出来ます。ですから、とにかく奥様は御神體をお守りして安全なところへ逃げて頂くのが一番良い方法だと考へます』

二人は眼を据ゑてさういふのである。

妻も考へた。御神體を侵入兵の泥靴に汚されては、教會長の妻として、罪萬死に當る。反つて自分が残ることが、教會をも、彼等をも危険にさしてしまふ。これでは反つて神様に申譯ない。かう考へて彼等二人の熱誠を聞き入れることにした。そして萬一の場合は御神體を背負つて逃げるから、後は二人でよろしく教會

を死守してくれと頼んだ。二人も妻の言を聞いて

『奥様、私達も命にかけて教會を守りますから安心して下さい』

とよろこんだ。或る日、隣の日華洋行の主人が來られて、

『これはどうも一戦交へなければ、納まりませんね。吾々はもう避難を覺悟せなければなりません。實はその時の用意に御相談に上つたのですが……』

との前置きで、吾々の家の近所は支那兵で取圍まれてゐるから、いざ避難といふ場合は大使館に一番近いところに居りながら一番危険である。むしろ裏通の胡同へ逃げた方が安全だ。その時は、佐野洋行様が私のところへ逃げ、私の所の屋根からお宅の庭に出、お宅の一番奥の食堂の屋根を越してその裏のビヤホール様の家に降り、その表門から蘇線胡同に出て、大使館參事館のお宅へ逃げませうとの相談である。勿論不賛成でない。早速、承諾し、四軒の日本人が連絡して屋根に梯子をかけ、避難の練習を始めた。

それから間もなく天津から傳道廳に集まる旨の電話が通じた。そして電報爲替が到着した。皆は傳道廳に限りなき感謝を捧げてゐた。その翌日、日本人信徒から列車が通じるやうであると知らせて來た。

列車開通のことは半信半疑であつたが、その翌日は天津傳道廳の月次祭日であるから、神意が私共を天津に集めようと動けば汽車は通じるかも知れないと思つて、とにかく各方面の邦人教信徒に連絡し、十二時頃に驛に出て見た。ところが幸ひ一時に天津行の列車が出るとのことである。早速その汽車に乗込んで、やつて來たのである。

列車の中で聞いた話であるが、昨日の列車に乗つた滿鐵社員の方が、大分何處かへ拉致されたといふ噂を聞いて、一同縮み上つた、と語るのであつた。

語り終つて妻はホッと肩の荷を下ろしたやうに、大きな呼吸をしながら、それでもやはり、

『今頃莫様、張様はどうしてらるだらうか……』
と獨語してゐた。

天津に集結した一同の者は、天津在住の教信徒と協力し、間もなく、時局活動として軍病院へひのきしんに毎日行くやうになつた。

市内の各教會の男子達は、驛頭に出て、晝夜交替で、通過部隊への湯茶の接待に活動した。

日本側の屢次の平和的交渉も聞かばこそ、挑戦的な支那軍は益々部隊を前線に増集し、容捨なく攻撃して來るのである。

前線では毎日激戦が展開されてゐた。病院へは負傷者が續々と後送され、四、五日の内に病院の廊下まで白衣の人々で溢れるやうになつた。婦人達の活動はだんだんと激しくなり、終に手が足りなくなつて、天津在住の教信徒を總動員せな

ければならなくなつた。

私は電話と手紙とで莫様と連絡をとりながら、北京の様子を凝視してゐた。

吾々が銃後活動に身魂を捧げ切つてゐる七月二十八日の夜半一時、突然、日本租界の南方に當つて物凄い銃聲が轟き出した。そしてそれは次第に西に東に伸びて三十分も経過しない間に、租界は完全に銃聲に包圍されてしまつた。

私は二階に駆け上り、窓際に寝てゐる者を起して、壁際に床を移さした。中には寝とばけて、

『もうお勤めですか』

と起きて來るものもあつたが、

『何でもないんだ。壁際へ寄つて寝るんだ』

といったトタンに物凄い銃聲を聞きつけて、

『ヒヤッ』

といふなり、がたく震へ出す者もあつた。

天津は戦場と化した、銃火の津浪が日本租界の四圍から押し寄せて來たのである。

私達は電燈を消して、運を天にまかせて朝まで待つた。

翌朝は物凄い地響に目を覺した。豆を煎るやうな銃聲の中に、時々窓の硝子を揺がせて物凄い地響きが起る。

窓から首を出して見ると皇軍の陸鷲が、支那街の敵に頭上から爆彈の御馳走を進上してゐるのである。

やがて建築地の方向に當つて砲聲が聞え出した。私はハッピ姿で早速工事場へ馳け附けた。見ると、皇軍の野砲隊が隣接の租界グラウンドに砲列を布き前方の南開大學を攻撃中である。

私は三階のバルコニーへ足場を傳つて馳け上つた。所々に煉瓦の飛ばされてゐ

るところがある。見ると皆彈丸の痕である。私は首を出して視線を壁に沿うて地上まで落した。

無数の彈痕がモルタルの灰色をえぐつて、傷いた身體のやうに中から煉瓦の薄赤色を覗かせてゐる。

私は激戦のあつたことを直感した。

グラウンドからは耳を劈いて砲聲が続けられてゐる。一弾毎に大學の屋根が缺け窓が飛んで行く。なほその上空に重爆が三機、大學の森の上を飛翔して、こゝでも爆撃を繼續してゐる。機上から落される爆彈が、手に取るやうに數へられる。砲撃と爆撃とに大學からは終に火をはき出した。黒煙は濛々と冲天に立昇り、凄絶、言葉もない。

私は多少の破損はあるが、建築中の廳舎が安全であつたので、早速報告に歸つた。

攻撃と爆撃とは終日續いたが夕刻には敵軍は全く沈黙してしまつた。婦人のひのきしん隊は、その日も早朝から命は神様にお任せして、飛弾の下をくゞつて軍病院へひのきしんに出勤し、男子も相變らず驛まで出掛けて行つたが途中で戦闘中のところがあるので空しく引返して來た。

丁度その頃、本部から慰問使として和久田先生が來應中であつた。吾々は煙草やキャラメル類を風呂敷やリュックサックに詰込んで、銃聲絶えた天津の街々を警備の皇軍勇士を求めて、慰問行に出掛けた。

支那街は既に避難先から歸家する群衆で、ごつた返つてゐる。その中に、あちらに一人、こちらに二人、勇士は土囊に潜んで警備に附いてゐられる。壊れた家飛ばされた看板、切れた電線、戦禍の生々しい跡が至る處にある。吾々が煙草を持つて行くと、勇士達は本當によるこんで下さつた。

『自分一人で、もうこゝを守備して三日になります。交替がないので何時まで守備に附かなければならぬかわかりません』

と語つてゐた兵士の顔が、どうしても忘れられなかつた。東站の前の焼けた家の軒下には、半焼の支那兵の死體が、手榴彈を脊負つたまゝ三つほど轉つてゐた。大経路の市政府は燃上中であつた。金剛橋の橋畔には拳銃彈が數百發こぼれてゐた。戦香が至るところに血惺く流れてゐた。

三萬箱の煙草は三、四日でなくなつた。なくなれば又新たに買つて毎日慰問に廻つた。

北京の在留邦人にも避難命令が出て、七月二十八日より大使館内へ引揚を行つたらしい。そして通州には聞くも悲惨な慘虐事件が行はれたことを知つた。

時局は三十日を楔機として、日本側の不擴大主義一擲の攻勢によつて急轉直下

した。暴支膺懲の軍は北に南に進められ、全く事變の様相を示して來た。居庸關の攻撃、獨流鎮の占領、馬廠の陷落、激戦は激戦に續いて、戦線は限りなく伸びて行つた。

男子は二班に別れて、一班は驛に出勤し、一班は婦人達と共に毎日軍病院の御手傳ひに奔走した。激戦毎に患者はふえて、學校を開けて收容された。私達は藁蒲團の運搬、白衣の整理、後送患者の出迎へに寧日なく活動した。

一面北京と連絡を取つて、心の中に歸宅の準備をしてゐた。

八月十三日、傳道廳から北京班の任務解除が發表された。その翌日北京は戦風一過し、商店も店を開いてゐるとの莫様よりの報告に接し、いよいよ歸京の用意をなし、時局活動は天津の教信徒に御願ひし、十七日の列車で歸會した。

莫、張兩君は私達の顔を見るなり、涙を流さんばかりによるこんだ。神護により、皇軍の武威により、多くの人々の努力によつて、北京は戦火の洗禮から免れ

た。砲弾に崩され、戦火に焼かれて、見る影もなくなると思つた教會も元の姿で仰ぐことが出來た。再びこの姿で相見え、相語ることが出來ないかも知れんと案じた役員二人の姿にも無事に遭へた。私達は互に手を取り合つて、感激と感謝に暫し語る言葉もなかつた。

二人は縷々と留守中の苦心を語つた。

妻が天津に出發して後、彼等二人は安全に教會を護り通すことに苦心した。第一は教會の偽装であつた。中國人間には一般に寺廟を荒すものは横死すると信じられてゐた。それで彼等は教會の内部から日本的なものを全部取除いた。表門の看板を外し、神殿内の簾を外し、黄紙に佛と書いた紙を家の内外にベタ／＼貼り附けた。そして支那の廟のやうに装つた。第二には支那兵の闖入を未然に防ぐことであつた。二人は五十幾個の西瓜を買入れ、教會附近の守備に當つてゐる中隊長を訪問、慰問品としてこれを贈つた。

かうした豫防策を講じて、二人は事變の推移を凝視してゐた。七月三十日宋哲元の北京放棄によつて、彼等支那兵も城外に移動、續いて京漢線に添つて遠く南に退却したので、二人はホット 魁 つた。

八月八日は月次祭の日であつた。朝から偽装を解いたり、看板を掛けたり、國旗を出したりして祭典の準備に取りかゝつてゐるところへ、日軍北京入城の快報が齎された。〇〇臺の〇〇〇部隊が、威風堂々教會の前の大通りに到着した。彼等はうれしさの餘り表門に立つて、頼もしいその威容に胸を打たれてゐる時、二人の將校の方が、車から下りて何かを求めてゐられる姿を發見した。日本人は避難中で、市街には一人の影も見當らない。將校の方は困つてゐられるやうである。

二人は早速、その側へ馳けつけ、日本語で尋ねて見ると、飲み水がないかとのことである。

二人は早速、中へ案内して茶をいれて出した。將校はよろこんで、湯を沸かしてくれ、兵士達もよこすからとのこと、二人はコックに命じて大急ぎで湯を沸かした。

間もなく、ドツと兵士が潮のごとく押し寄せて來られ、廣い前庭がカーキ色で埋まつてしまつた。二人は僕役達を督勵し、全員總出で茶を運んだ。

その日の月次祭は、市街の通行禁止で信徒達のお参りなく、二人の役員で勤められた。

北京の治安は恢復したのである。日章旗の下に蘇生したのである。二人はその時のうれしさを思ひ出すかのやうに、目を輝かして語るのであつた。

北京へ歸つた吾々は、早速各信者の家を訪問して廻らうとした。が二人の役員は暫く見合はせといふので、もう暫く待つことにした。

民衆はこの事變を凝視してゐる。表にこそ日の丸の旗を出して、日軍歡迎の意

を表してはゐるが、彼等の心の底に流れるものは、やはり、支那軍必勝の信念であつた。蒋介石の軍規軍が北上して来れば、日本軍は一たまりもなく敵を潰されてしまふと信じてゐるのであつた。

憧憬の中に九月の月次祭の日が秋風に乗つて訪れて来た。

私はどの信者にも通知せず、月次祭の準備をした。そして午後二時、定例通り祭典を執行した。祭典の始まる前に七、八名の信者が参拜に来た。私はそれだけで日頃の私の祈りが報いられたことを神に感謝した。だが祭典が進行するにつれて、遅れ馳せに、續々と信者達が集まり、祭典が終つて私が説教臺に立つた時には五、六十名の人数に増加してゐた。

私は身内に波打つ感激を覺えた。

治安未だ定まらず、日軍勝つか、支那軍勝つか、流言蜚語は横飛し、砲煙なほ北京から遠くない時、漢奸の嫌疑もおちず、走狗の悪罵も物ともせず、救け一條

に結ばれた熱烈なる信仰に動かされ、何等の通知もせなかつたのに、教會の祭典日を忘れず参集してくれた教信徒の姿に、私は言語に盡せないうれしいものを感じた。永年の私の祈りも、本當に彼等の魂にまで滲み透つてくれたかと思ふと、感激を禁じ得なかつた。

私は早速寫眞屋を呼び、一同の記念撮影をした。

事變は一切の制度を改廢して行つた。第一に電報と郵便が諜報關係により、日本人のものは軍關係で收發されるやうになつた。

内地との郵便物は一切民團によつて取扱はれ、野戦郵便局の手を経て收發された。

或る日、民會に所要のため出向いた私は、その廊下にうづ高く積まれた郵便物に驚いた。民會ではボーイ達に送遞させてゐられるが、到底數人では分類さへ困

難である。この困窮状態は強く私の心を打った。居留民のためなら私がよろこんでこの任に當らうと、早速郵便係を申し出た。民會からは許諾され、翌日から教會のボーイ、青年、信者達を動員し、靴と自轉車とを用意して郵便屋になつた。私が分類する。皆が送り届ける。かうして雨の日も風の日も、居留民各戸に郵便物を配達した。この間妻は國防婦人會員として、天津における同じ奉仕に邁進した。

約二十日ばかり経つた或る日、義勇隊から兵站宿舎に教會を提供してくれんかとの申込みであつた。私は快諾し、民團に走つて郵便係をお断りし、妻も病院の奉仕を断つて教會内での時局活動に専任することにした。

その日の夕方から部隊が泊つた。二階の客間や居間等の疊の部屋は將校の宿泊に、階下の參拜所、保育室、教室、應接室等はアンペラを敷いて、下士兵卒の宿泊に指定された。食事は傳票によつて、近所の指定食堂から運んで来てくれ、教

會としては湯茶の準備と風呂の用意とを奉仕した。大釜で一日湯を沸かしたり、朝から風呂をたてたり、教會全員といつても我々六人の小人数が、獨樂のやうに活動した。遅い部隊は夜十二時に到着する。早い部隊は午前四時に出發する。吾々は毎晩ほとんど三、四時間ほどしか睡眠がとれない。しかし私はうれしくて勇んで頑張つた。私の次の弟も出征した。私は兵隊の姿を見る度に弟の係を思ひ出した。私は弟にしてやるつもりで、宿泊の勇士達に能ふ限りお世話をした。

或る日、私が兵士達に食事の配給をやつてゐる時、誰か一人の兵隊が私の肩をたたいた。私がフツと振返つてよく見ると弟である。生きて再び會へないと思つてゐた弟が、私の後に立つてゐるではないか。何だか夢のやうだが確に弟である。

『兄さん、御機嫌よう』

『宣雄か、よう来たな』

二人は手を握り合つたが暫くは後の言葉も出ない。私はこの時ほど、弟の顔をまじく見たと見たことはなかつた。

『こつち来い、二階の部屋に行かう』

『いや、准尉殿や他の同僚があるから、先に紹介しよう』

弟は人波を分けて、私を彼等のところに案内し、部隊の引率將校に紹介した。

私はその部隊の方々の部屋を決定して居間に弟を案内した。事務室にゐた家内も、茶を運んでゐた莫、張二人の役員も驚いた。皆既に日本で見知りの関係である。

弟は天津に連絡に来たのである。北から来ると、どうしても北京で一泊せなければならぬ。驛から兵站司令部に行き、振り當てられた宿舎が、意外にも自分の兄の教會であつたのである。不思議な邂逅である。夢のやうな邂逅である。

彼は二階の私の室に入るなり、

『兄哥、甘いものないか』

と、食ふことが一番である。その朝、信者がお供へして行つた月餅を思ひ出し、私は青年に持つて來させた。彼は自分で赤い紐や赤い紙を取つて、箱の中から出すなり、うまい〜といつて見る〜十五、六平らげてしまつた。

『おい、もうすぐ支那料理の御馳走をするから控へておけよ』

私は平素甘い物が餘り行けない弟を知つてゐる。國家の干城として、大切な任務を負うてゐる今、病に倒れることがあつてはと戒めたが、

『甘い物は甘い物、支那料理は支那料理。入るところが違ふよ』

そんなことをいひながら、平氣で平らげた。

その夜兄弟は久々で楽しい床を列べて寝た。弟はこんなことをいつてゐた。

『俺は今日まで、教會の仕事や信者のお救けに、命懸けた眞劍だといひ、自分もそのつもりでやつてゐる積りであつたが、本當の命懸けつてあんな氣分と全然違

ふ。身で感じる以外、口ではいへんね。俺はよい體驗をしたとよろこんでゐる。そして戦闘しながらかう考へたよ。

戦闘とは慾の捨て合ひの競争だとね。どちらが早く自分の慾を捨てるか、その早い遅いで勝負がきまるね。支那兵は吾々よりも何倍もの慾を持つてをる。それで何時も連敗してゐるんだ』

私は成る程と思つて聞いた。

弟は翌日天津に行き、所要の連絡を濟ませて又歸つて來、北京での連絡を終つて任地へ歸つて行つた。私は彼を門口に送り、健康で戦へ皇國のために、と祈らざるを得なかつた。

當教會の兵站宿舍は約一ヶ月續いた。その中に他に永久的な設備が整つたので解除になつた。

十月十三日、北平は北京の舊名に還つた。十一月三十日には臨時政府が五色旗も輝かしく誕生した。

北京の治安は追々恢復した。が、それは以前のまゝの姿ではなかつた。それは東亞新秩序建設といふ新しき目標に向つての新發足の姿であつた。中國自らの復活だけでなく、東亞といふ多くの國々のためへの復興であつた。

皇軍は朝に一塞を屠り、夕に一城を陥れ、赫々たる戦果を納めた。だが輝かしい勝利の萬歳の聲の前には、多くの若き英靈が護國の鬼と化し、新しき建設の人柱と斃れて居るのだ。

これを思ふ時、第一線の現地に、興亞の營みに參劃せるものは、事變處理の急務なるを痛感させられた。その好むと好まざるとに拘らず、これは日支兩國民の双肩に荷はされたる世紀の使命であつた。

私は内地に走つた。そして各方面に中國傳道者の派遣の必要を絶叫した。そし

て恩師深谷先生に説いて、上級河原町大教會の北支出張所を當教會に併置し、河原町系教師の北支進出の足場とした。

翌年一月には幼稚園と日語學校の復舊を完成し、同時に開校した。二月には私の愛弟子の一人、張彭年が慘虐の街、通州において傳道所を設置してくれた。

間もなく大教會から布教師が派遣されて來た。私は彼等を支那傳道者に育成するのに腐心した。

私は少くとも二年乃至三年、當教會において中國語、中國人並に中國傳道を研究させ、それ〴〵傳道基地を探して、北支の主要地點に分派したかつた。だが私のこの計畫は、半ば不成功に終つた。それは、彼等が、

- 一、時局認識に除外してゐること
- 二、傳道精神の薄弱なること
- 三、自己鍊成の念に乏しきこと

と、私の不徳に歸する。五人中僅に二人の者が、初志を固持貫徹してくれた。

一人は現在濟南で華人傳道に奮闘してゐる天理外語出身の山本道男君であり、もう一人は今、長辛店で苦勞の布教道に邁進してゐる内田信三郎君である。

山本君は北京到着後、間もなく濟南行きまでの期間通州にやつた。そして張彭年と協力して、通州救濟の衝に當らしめた。通州傳道所では日本人は山本君一人だけである。日本語を話し度くても聞いてくれる者がない。彼は、否應なしに一切を支那語で處理して行かねばならなかつた。

山本君は張所長と協議の上、傳道所内に通州天理日語學校を設立し、傳道の餘暇を利用して、中國人に日語教授を始めた。

彼の中國語は日進月歩、暫くの間には中國人と見誤られるくらゐに上達した。と同時に信者の教化を通じて、中國人及び中國社會の表裏が洞觀されて、彼の傳道準備の基底が日一日と強化されて行つた。これが彼の理の伏込みであつた。

當教會も入信の信者が日に増加した。信者は新しい信者を紹介し、新入信者はまた新しい入信者を紹介し、芋蔓式に増加して行つた。

新入信者はいふのである。

『私は天理教と聞いただけで、淫祠邪教でないことを知りました。中國では古くから天理良心と云ふことをいはれ、これが宇宙の道德原理であります。自然は天理によりて動き、人間は良心によつて正しきを持することが出来るのです。私もこれから先生の弟子になりますから、よろしく御教導下さいませ』

また或る信者はかういつてゐた。

『天理教の傳道者の方々程、親切に吾々のことを心配して下さい方はありません。中國には政府もあり、官廳もありますが、人民の本當の苦痛を救つてくれる所は一つありません。昔からの惡癖で、勢力のあるもの、財産のあるものが

社會の善惡正邪を鬻斷してゐます。如何に正しくても、力と金の前には理非も善惡も通りませんからね。だから、誰も政府のため、社會のために力を入れるものがなくなるのですよ。

私は以前から、人は不親切なもの、金がなければ正しく暮せないもの、自分の力で出来ないことは没法子と諦めることだと考へてゐました。しかし、貴方方の親も及ばぬ心からの御親切に、私は本當の人間を見出したやうです。これからどうか私を救つて下さい』

信者の増加は吾々を多忙にした。いくら働いても、手の中には仕事が山程残つて行つた。必然的に手不足を感じ出し、何とか教師養成に力を注がねばならなくなつた。

かくして張靜軒、葛學堯、趙華堂の三名が天理教校に送られた。

教會はその頃二つの附帶事業を持つてゐた。一つは日語學校で、他の一つは北

京幼稚園であつた。兩方とも急激に學生なり園児が増加して行き、從來の四十五間だけでは、どちらも到底收容出来なくなつて來た。

丁度其の時、教會の西側の隣接地約八十坪が賣物に出てゐた。信者達は躍起となつて買収を提唱した。

そしてそれは間もなく通州傳道所長張彭年の父君たる張捷三氏の力によつて無事買ひ取られた。そしてその翌年、劉印忱、袁進南、張捷三、張潤生、張朗軒、張少臣、郭尙文、米少堂、葛席珍、王振聲、孫逸僧、許經揚等、教會の中心信者達の熱禱によつて、建坪約四十坪の崇文教館が建築された。

教會は多忙に多忙をきはめて來た。皆が手一杯の仕事を持つて、一日中馳け廻らねばならなくなつた。だがこれが建設の姿であり、伸び行く姿である。

昭和十五年夏、當教會では御本部より、教會としての御分靈を下附して頂き盛大に奉告祭を勤めさして頂いた。

三百有餘の中國男子信徒達が、嚙嚙たる雅樂の音に浮き立つ心を壓へながらも、翳す紅提灯の火も赤々と、かつがれ行く御神靈の輿に奉侍して、その昔、私が夏日冬風に曝されながら、來る日／＼を病人を求めて歩きまはつた東單牌樓の大街を、靜々と我が教會に神靈奉迎の歩を運ぶ姿を見た時、過ぎし昔の荆棘の道が思ひ出され、萬感胸に逼つて、熱涙の滂沱と頬を傳ふのを禁じ得なかつた。

北京、崇文門内大街の一角に聳ゆる崇文教會は、日華兩國民の熱誠を集めて出來た教會として、各方面から大きな注目と期待をかけられてゐる。

早曉に鳴り響く太鼓の音は、中國四億五千の民草の幸福と、安寧とを祈る朝勤めの聲であらう。

夕照に響き渡る拍子木の音は、今日一日の働きを終へて、感激と感謝を捧げる夕勤めの祈りの音であらう。

教會内の至る所に、日本語と中國語の對話が、何のこだわりもなく取り交され
てゐる。

教會内には二十人の日華人が一家族をなして暮してゐる。皆が一つ釜の御飯を
頂き、同じ風呂に一日の汗を流してゐる。

朝からは幼稚園が始まり、小さい子供達のはち切れさうな可愛い聲が、廣い教
會内に溢れ返つてゐる。夜は各教室から日本語や中國語の朗讀の聲が前庭一杯に流
れてゐる。

毎月八日の月次祭にもなれば、支那服姿の教信徒達が、百疊に近い神殿内に満
ちくく敬虔なる感謝の祈りを捧げてゐる。

祭典に讀まれる祝詞も日華兩文で書かれてゐて、祭典後の講話も日華兩國語で
行はれる。

只、教祖によつて書かれた御神樂歌のみが日本語そのまゝで、日華兩國信者に

よつて奉唱されてゐる。

祭典は教服で勤められ、お神樂は黒の中國服で勤められる。その中國服には背
中に一つ梅鉢の紋が附いてゐるのが、普通の中國服と違つてゐる點である。

全く日華一體、混然たる姿である。

この教會こそ、つたなき私共の懸命の祈りの稔の姿である。

不肖私を會長とし、日本人教師六名、中國人教師八名、教徒十名が神命弘通に
献身の活動を續けてゐる。信徒は未だ僅か九百六十三戸しかないが、互に固い心
に結び合ひ、それらの立場において興亞の聖業に努力してゐる。

神の靈護により、皇國の恩威により、人々の熱誠により、崇文教會は興亞の新
建設に、日々の力ある前進を進めてゐる。

尙、通州には張彭年君を所長として、三百餘名の信者達が通州傳道所を結成
し、近郷地區の救済に撓まざる挺身を捧げてをり、濟南には、通州傳道所におい

黄土に祈る

て長き伏せ込みの理を積み上げた山本道男君が、劉印忱氏の協力を得て、處女地
開拓に雄々しき勇歩を踏み出してゐる。

事變發祥の地、蘆溝橋。

その橋畔に程近き宛平縣城の中にも、昨秋十月から内田信三郎君が乗り出し
て、その附近の中國人と伍して、日夜興亞の祈りを縣城の一角に捧げてゐる。

月光に銀波を躍らす永定河の水聲は、四年前には日支軍衝突の銃聲を研さした
であらうが、今に新しき幸福と建設とを神に願ふ、農郷男女の敬虔なる祈りの聲
に和して、黄土の涯遠く流れて行くであらう。

支へる柱

私が私の祈りを黄土の上に捧げるために多くの人々が支へる柱として、強い力を與へて下さつた。私はその人達に厚い御禮心を常に抱いてゐる。さうして私は今日までの祈りの成果は、半ばその人々の力であると確信してゐる。

私は先づ私の恩師、今はなき前河原町大教會長深谷徳郎先生に、心からの感謝を捧げたい。

私を語學校に入れて下さつたのはこの恩師であつた。

大正十四年三月、語學校が創立され、その生徒募集のポスターが各教會に配布されて來た時、吾々青年の心は誰しも浮き上つた。私の教會、河原町大教會からも誰か入學志願者を送らねばならなかつた。會長様は、

『部内の者に入學を勧める前に、大教會の内部からその手本を示さねばならん。誰か語學校へ入學の希望者はないか』

皆を集めてかう仰有つたが、誰も申し出るものがない。役員會議の結果、白羽の矢が立つたのが磯田義三郎君と私とであつた。

私は會長宅に呼ばれて、會長様から訊ねられた。

『今度語學校が出來て、各教會で誰か入學希望者を募集せなければならぬのだが、河原町大教會としてお前行くか』

私はうれしくてたまらない、言下に、

『はい、よろこんでやらして頂きます』

會長様は規則書を私に見せて、

『語部がこれだけあるが、お前は何語をやりたい』

と私の希望を尋ねられた。私は即座に、

『私は支那語を勉強したいと思ひます』

とお答へした。會長様は、

『どうして支那語がやりたいんだ』

と尋ねられたので、私の抱負を説明した。

『現在本教で海外に最も発展してゐるのは我が河原町です。一般から河原町の海外傳道か、海外傳道の河原町かとまでいはれてをります。その海外教會の多くは滿洲、支那に強固な地盤を築いてゐます。早晚、中國人が入信して、本部參拜に日本にやつて來ると思ひますが、その際、上級の大教會として、千里の海山を涉つて來た異邦の人々に、支那語も話せず、充分な教理の仕込みも接待も出來なくては、神様に申譯ないと考へます。ですから、そのお仕事を私が引受けてやらして頂くために、支那語をやり度いと思ふのです』

『うん、さうか。それに違ひない』

會長様は満足さうな顔をして、私の語學校入學を許して下さつた。

私はよろこんで、家へ飛んで歸つて、父母に會長様との話の次第を報告した。

私は父母もきつと喜んでくれるだらうと心に信じてゐた。ところが父は思ひがけなくも、

『馬鹿！』

私は頭からこの一聲を浴びせられて、父の意中を判じかねた。父は續けて、

『お前は何といふ間抜け者や、儂はお前の語學校入學は不賛成や。お前よう聞け。親として我が子の出世を願はんものはない。お前を語學校に入れてやりたい氣持は儂は十二分に持つてゐる。だが考へて見よ。儂の持つてゐる教會にも、お前ぐらゐの年輩の若い者が澤山ある。それも皆儂の子同様だ。お前を上級學校に入れてやりたいと同じやうに、その青年達にも勉強さしてやりたい。だが儂の今の力では、それが出來ない。お前だけを語學校に入れて、それ等の青年を上級の學校に入れてやらんといふやうなことは儂の信仰として許されん。お前の語學校入學は不賛成だ。儂が會長様のところに行つて斷つて來る』

父は下駄をつゝかけて會長宅へ出て行つた。會長様と父の押し問答があつて、會長様は父の言葉を聞き入れられた。さうして改めて私を大教會青年といふ立場において、語學校入學を許されたのである。父もこれには一言もなかつた。却つて會長様の大きな親心に感激して歸つて來た。

私は間もなく語學校に入學した。一切の費用は會長様のお手許から頂いた。両親は我が子の勉學に會長様に御苦勞かけてはと、會長様へ理立の道を運んだ。私の支那語は會長様と親のお蔭で習得することが出來たのである。私はこれ等の人に厚い感謝を感じるのである。

私が北京へ來て傳道に従事するやうになつてからは、大堀、布施の兩家に多大の援助を頂いた。

大堀様は名京の部屬、仙臺分教會の信者であつた。當時北京の滙業銀行に勤務

してをられた。

トランク一つ提げて、北京に乗込んだ私達が、蘇州胡同の新居に移轉した晩、いざ寢ようと押入れを開けて見ると蒲團がない。オヤと一時驚いたが、よく考へて見ると蒲團といふ代物は、内地出發以來、持つて來てないのに氣附いた。ハハ、と笑ひはしたものの、中秋の夜氣はひしくと身に迫つて來る。着物や外套を引ずり出して一夜二夜はあかしたものの、蒲團のないものは、何としても熟睡が出來ない。たうとう大堀様の家へ行つて、夏蒲團の空いたのを借して頂くことを願ひした。

一同は吾々の呑ん氣さ加減を笑はれたが、奥様は快く蒲團を貸して下さつた。私は全く涙の出る思ひがした。その夜から三人はどうにか足を伸ばしてゆつくり寝ることが出來た。

吾々は困つたことがあると大堀様に走つた。次に困つたのは風呂であつた。十

日や二十日は我慢出来るが一ヶ月にもなると身體中が痒くて、水で拭いたくらゐでは気が済まない。私達は大堀様へ行つてお湯を貰ふことをお願いした。これも快く聞いて頂き、それから後は隔日にお湯を頂きに行つた。私は湯槽の中にひたりながら、幾度感謝の合掌をしたか知れない。

吾々が貧乏と戦ひながら、中國傳道の道を開拓して行くので、奥様は深い同情を寄せて下さつた。何か變つたお菜を作られた時は必ず阿媽を遣はして夕食を食べに來いと呼んで下された。困窮時代にはこれがどれだけうれしいことであつたか、今思ひ出しても温かい情に胸がしめつけられる思ひがする。

朔風が街々に吹き荒ぶ冬が訪れても、吾々には焚く石炭もストーブもなかつた。いつしかこのことが大堀様に知れた。奥様は早速ストーブ屋に命じてストーブを取付け、大同の優良炭を半噸届けさして下さつた。

その夜吾々は赤々と燃えるストーブを圍みながら、限りなき感謝の語らひに冬

の夜の更けるのも忘れてゐた。

大堀様の勤めてゐられた滙業銀行は排日の旋風に巻き込まれ、大取付を食つて倒れてしまつた。大堀様はその後残務整理の責を負はされて、暫く北京に止まつてをられたが、それを果して内地の郷里に一家引連れて歸られた。

『田舎へ歸つて 鶏でも飼ふかね』

幾多の恩を受けながら、何一つとして未だ報い得ざる私には、大堀様のこの言葉が痛く胸に響いた。私は神前に、幾度もくく大堀様のために祈らざるを得なかつた。

大堀様の引揚に附いて、色々の道具を吾々は頂いた。私は御主人の使つてをられた書架を頂いた。

今私の居間の机の横に立つてゐる茄色の書架こそ、その時の書架であり、私の永遠の記念品である。

大堀様と同じやうに面倒を見て頂いたのは、當時大毎北京支局長を勤めてをられた布施勝治様の奥様である。三條胡同の支局の中に家を持つてをられた關係上、私は街頭傳道の歸りに御邪魔した。行くと美味しいお茶や菓子を必ず御馳走して下され、又夕食をよんで下されたりした。

晩春の或る日曜日、吾々三人の傳道者は奥様から招待されて、北海公園へ布施様一家とピクニックした。北京へ来て七ヶ月目、私は始めて北海公園の絶景に接したのである。白塔の下、柏樹の森の中で、可愛い子供様相手の楽しい一刻、なごやかな家庭の風に傳道一色に凝固してゐた私の心は、どれだけ温く慰められたか知れない。私は子供の手を引き、摘草したり、鳥の囀を聞いたり、下に降りてポートに乗つたりして、春の一日を心行くまで楽しんで頂いた。

だが布施様も御主人の本社への轉勤のため間もなく大阪へ引揚げられた。傳道初期の私を支へて下さつた人々は、かうした信者の方々ばかりではなかつ

た。ともすると崩れ易い吾々の精神を、理の上から振起さして下さつた方々も多い。

當時傳道廳長を勤めてゐられた故平野好松先生には、ことの外可愛がつて頂いた。忙しい教務の豫暇を割いて、十日に一度は必ず御手紙を頂いた。皆仕込みの手紙である。先生が廿一歳の頃、廣島へ布教に行かれた當時の苦勞の話を引例として、諄々と書き綴られる手紙の中には、感激なくして讀まれない眞實の文字が幾つもあった。私はこれに鞭打たれて、ひるむ心を幾度ふるひ立たせたか知れない。先生から頂いた書翰は一枚も捨てずに今も保存してある。

傳道の初めの頃の一節にこんながある。

貴君の傳道は貴君一人の傳道には御座なく候。右に大日本、左に天理教といふ二つの大きな者を雙肩に荷つての傳道にて候ゆる貴君一個の奮闘努力は必ず何等かの點よりして國家の上にも響き居り、國運盛衰に影響有之ものと御思惟

相成度候。

又或る時こんな御手紙も頂戴した。

私も青年時代には不自由の中、苦勞の中を通らせて頂きました。それゆゑ貴殿等の苦勞、身に浸みて感ぜられます。傳道廳において結構に三度の食事を頂く度に、貴殿等のことを思ひ、今頃何處でどんなものを頂いてゐることやらと考へ、又夜分になれば色々の虫に攻められて、今夜もよく寝ることも出来ないであらうが等と考へられ、床の中で知らずくの内涙で枕をぬらしてゐることもあります。

なれど貴殿等は、軍人が戰場に出たのも同様如何な苦勞の中も耐へ忍んで、中國人救濟のため必死の努力を御捧げ下さいませ。

本教五萬の教師中、中國人布教に献身せるものは貴殿等のみにて、苦勞も大なると共に、神様、教祖様の御守護も必ず大なるものがあると信じます。

私は身は天津の傳道廳にをりますが、心は常に貴殿等に附添うてゐます。萬一身上や事情や其の他の煩悶がありました時は何時でも御申越被下度、私の心身の叶ふ限り、どんなことでもさして頂きます。……(後略)

諄々たる理の仕込、切々たる親心の吐露に、吾々の若き心はどれだけ感激したことであらう。

傳道廳の和久田先生にも色々の貴い御仕込みを頂いた。私は先生から理の仕込を色々頂いた。理を立てることゝ實行に富んだ先生からは、率先と敬虔とを教へられた。とかく神様には押れ易い吾々であつたが、嚴然たる神へ御仕へせられる先生より、本當の神様への奉仕の態度も教へられ、又先生の實行によつて、自ら衆に率先して範を示すといふ精神を強く教へられた。

私が傳道を始め二二年目、父母は滿洲方面の巡教の歸途、わざく北京に寄つて下さつた。その頃私は罐兒胡同に三間間借りして、やつと傳道が緒につきかけ

た當初である。

子供の傳道を指導してやり、支援してやるためには、どんなところで、どんな風な傳道をしてゐるか、一度見なくては本當の仕込みがしてやれない。これが父母を北京まで來させた原因であつた。

私は本當にうれしかつた。親の温かい膝下を離れて、言語風俗を異にする異邦に、社會の荒浪と排日の豪風と戦つて、やつと何とか信徒の十五、六軒を御守護頂いたところである。親の慈愛が苦闘のドン底生活を通して、ひし／＼と思ひ出されて來てゐる時であつたので、父母の北京訪問は全く早天の慈雨であつた。

排日が激しいので父は支那服を着て出歩いた。

私の傳道先を私に案内さして、一巡した父母は私に種々な指導をしてくれた。父は私に、

『おさづけは千人の人を救い上げて、やつと本當の力を出すものだ。千人救いを

目指して突進しろ。傳道者の道はこれ以外にない』

と、教へてくれた。

狭い間借りで、親子三人が楽しく暮した。母は私が夜になると窓から闖入してくる白蛉にひどくさゝれて、手足に澤山赤痕を作つてゐるのを見て、

『蚤にも食はさんやうにして育てゝ來た子やのになあ……』
といつてゐた。

一ヶ月十元の生活を見ながら、父母は一言の『苦勞だなあ』との言葉も漏らさず、十五、六日滞在して、内地へ歸つて行つた。

私は塘沽の波止場に立つて、遠ざかり行く長安丸の父母に手を振り／＼、何時再び逢ふことが出来るか知れない名残り惜しい感懷に、胸をしめつけられながらも、父母の苦勞に劣らないだけの苦勞の道を通つて見せると、心に強く／＼誓つた。

その後間もなく、御歸國中の平野廳長様と深谷大教會長様との御相談の結果、その年の七月から私の傳道補助費を、大教會から月二十圓宛支給して頂くことになつた。月二十圓、考へ方によつてはそんな小額で傳道が出来るものかといはれやうが、私は既に月十圓の補助費によつて既に道を開拓して來た。二十圓は従前の倍額である。これだけ頂いて道を伸展せしめられんやうではどうなることかと、勿體なく感じた。その後五ヶ年間、私は大教會から月々かうした經濟的援助を頂いて、私の傳道基礎を固めて行つたのである。

その翌年、私は深谷會長様から結婚してはといふ相談を受けた。傳道一路の私には支那人の救濟以外には何等考へられない。青春をぶち込み、快樂を捨て、生活を捧げ、あらゆる人間的な慾望を一切犠牲にして、教祖の道を慕つて、傳道線上を突進してゐる私には、全く考へも及ばないことであつた。私は早速御斷り申し上げた。理由は時期尙早として。

然し再三再四の御懇願に、私も結婚問題を本氣に考へるやうになつた。救けるべき人々は、私の周圍に蝟集してゐる。左を見ても、右を見ても、經濟的にも精神的にも、將又肉體的にも神の恩恵に貧困な人々ばかりである。私一人の力では到底手が廻りかねてゐる。朝八時から夜十一時まで、食事を忘れて働いても到底廻り切れない。誰か適當な協力者が得られればとも思はんこともない。妻を娶つて、その助力を仰ぐ。それも結構なことである。

だが、私には妻を養ふだけの經濟的餘力を持つてゐない。こんなどん底生活の中に、一人の娘を抛げ込むことは、私としてどうしても感情的に申し譯ない。私はどこまでも時期尙早でお斷り申した。

だが會長様からは、せめて決めて置くだけでも決めて置け。そのために一度内地へ歸つて來て、一度本人にも逢つて見よとの來信であつた。

翌年の春、私は張君を御守護頂いて、本部參拜、授訓拜戴に彼を伴つて歸國し

た。

會長様からは諄々と諭された。當時まだ在學中だった彼女にも逢つて話して見た。彼女の信仰は強く私を打つものがあつた。彼女に私のどん底生活の赤裸々の實狀を打ちまけた。彼女はそれに驚かないばかりか、反つて力強く私を勵ましてくれた。

私は會長様の御氣持が分つたやうな氣がした。そして一切を御一任することにした。

結婚の話は、急テンポに進展して、私の歸國中に婚約が纏つた。

かくしてその翌年私は妻を迎へた。その後は傳道費を月三十圓宛に増額して頂いた。

私達が結婚し、夫婦力を合はせて開教に邁進し多くの苦勞の荷を負つてゐるその翌年、私の父は忽然と亡くなつた。私が馳け附けた時は既に物いはぬ冷い遺骸

となつてゐた。

道未だ草創の中にあつて何一つ鴻恩にも報いられず、只幾多の苦勞と世話のみしか掛け得なかつた私は、父の冷き胸に顔を押しあてゝ泣いた。せめてもう十年生きてゐてくれれば、何とか安心さす道もあるものをと歎いた。

私の大きな支柱は倒れたのであつた。空虚な、冬空のやうな、心を抱へて葬送を濟ませ、私は再び北京へ歸つた。

父を失つた私の打撃は大きかつた。如何な苦勞も窮迫も懊惱も、父の笑顔を思ひ出しては克服して來たものを、よくやるなあ、頑張つて行けよと力付けてくれるその父のなくなつた後は、その楽しい期待も捨てなくてはならなかつた。

と同時に長男として、内地に残した母と弟のことが後髪を引かれるやうに案せられる。

そんな普通の母でないと私は母を強く信じてはゐたものゝ、父なき後の老いた

母の淋しさを思ふ時、身を切られるやうな苦しさを胸に感じるのである。

母の膝下で孝養を捧げたいと思ふ心と、中國人救済の捨て得ざる實状との間に挟まれて幾夜床の中で悶えたことであらうか。

だがその度に私を導いてくれたのは、教祖様の御苦勞の道と妻のやさしい慰めの言葉とであつた。

私は私情を捨て、理に添うた。母の淋しさを思ふ毎に神に祈つて、私は神命達成に悩む心の一切を投げ込んだ。悩むことが多ければ多いだけ、私の傳道は白く燃え上つた。

私のつたなき働きをもつて、遠い故國の母の身を、母の心をお守り下さい。

これが私の祈りの心であつた。

やつと私が悩みの中からくぐり抜けて、ホッと息附く間もなく、妻の父が病で斃れた。

私の妻への感謝はそのまゝ岳父への感謝であつた。岳父の病臥は私の心を暗くした。

私は妻を内地に走らせた。妻は幸ひ父の病床に、看護の眞心を捧げ得られた。だが来る音信毎に病状は悪化し、再起不能の知らせを私は手にした。私は一切を張君に頼んで、内地に飛んだ。

母の安否を伺ふのも匆々として、妻の里に走つた。私はそこに泊りがけで、毎日看護の世話をはげんだが、岳父も終に不歸の客となつてしまつた。葬ひを終へて、二人は再び空しき心をかへて北京に歸つた。

妻も我も二人は父を亡へり

渤海渡る雁の音身にしむ

甲板に立つて、冬の海空を仰いで、私はこんなことを口誦んでゐた。

男は父親をたよりにする。私は一年の間に頼りとする二人の父を失つてしまつ

た。

父達の進む傳道の姿は、それ自體が私の傳道の指針であつた。父の信仰は、そのまゝ自分の信仰として受入れられた。私は父達からどれだけ傳道上の大きな感化を受けてをつたか知れなかつたのである。

父二人を失つた私は心の歸趨に迷つたが、幸にも深谷大教會長様が、本部の社會部長から、滿洲並に天津の傳道廳長として轉出して來て下さつたので、心の手綱を取り直した。

滿洲事變が赫々の戦果を上げて、王道樂土建設に奮進してゐた。

會長様は度々北京へ巡教して、私を鼓舞して下さつた。

或る月の月次祭に私が天津に行つたところ、深谷廳長様からこんな相談を受けた。

『お前の北京の道も、排日の影響を受けて、一進一退の現状だが、前途の見込は

どうかね』

これはむづかしい問題だと思つたが、私は率直に私の所信を語つた。

『前途の見込と仰有いますと、一寸六ヶ敷い問題ですが、まだ海のものとも山のものとも豫斷が許されません。果してこのまゝ固つて行くものやら、それとも潰してしまふものやら、現在ではまだ一向前途の見通しがつきません。私は一切を神様にお任せして、眞直ぐに前進して行くだけです』

『それしか道がなからうなあ。それで儂も考へるのだが、一層滿洲に行つてはどうかと思ふ。傳道の經驗も積み、支那語も自由に使へるやうになり、中國人の性質もよく分るやうになつてゐるのだから、新京あたりに地盤を築いて、新興滿洲國の大官連中に傳道して行くと、面白いものが出來やしないかと考へる。北京をやめて新京に行かんか。どうかね』

私は晴天の霹靂であつた。すぐには返事の言葉も見出せなかつた。會長様は言

葉を繼いで、

『實は天理村の關係で、大教會として新京に一軒家が買つてあるんだ。そこを根據としてやれば良いんだ。どんな應援もしてやるから』

私には勿體ない見込まれた話である。北京に比ぶれば滿洲は全く樂土の天地である。布教權の問題もない。排日の嵐も吹かない。大手を振つてどんな傳道も可能である。然も周圍には、日本と握手を求めて、手を差し伸べてゐる人々ばかりである。傳道の容易さは火を睹るより明らかである。

だが私は今日までの北京における苦闘を考へ、やうやく擴げ來つた傳道の今日を思つた時、私の周圍に集り來たる四、五十名の信徒が、私達のさりし後に、どんな心の淋しさと迷ひの路に悩むかと思ふ時、私には私の去就について、なほもう一つの判斷を下し得なかつた。

『會長様、現在微弱ながら、私の傳道所には五十名許りの信者が集まつて居りま

す。會長様の御心は私にはよく分りますが、もう一つお答への返事に迷つて居ります。一度是非北京の現状を御視察下さつた上で、御決定して頂いても晩くはな

いと思ひますが……』

『それもさうやな。それでは近々、北京に巡教するから、その時ゆつくり相談しよう』

その後暫くして會長様は奥様と御同道で廳長として北京へ巡教して下さいました。

私の傳道所では、私の恩師をお迎へすると一同は張り切つてゐる。私は家内以外の誰にも、會長様のお話の次第を語らなかつた。

會長様は御到着になつた。信者達は驛に出迎へるもの、門前でお迎へするもの、それ／＼手分けして盛大に歓迎した。

御到着と同時に一同は神殿に集まつて、御挨拶を申し上げた。五、六十名集まつてゐるやうであつた。

會長様は私の部屋で、汽車の疲れをお休めになりながら、私達夫婦に向ひ、『今日は澤山集まつてゐるな。皆なか／＼熱心さうだね。こゝまで御守護頂くのには、なか／＼並大抵の苦勞ではなかつたらう。新京行はどうする』とお尋ねになつた。私達の決心はもう定まつてゐた。

『お言葉でございませうが、私はこの信者達を見捨て、滿洲に行く氣にはなれませんが。この中には私と生死を共にすると誓つてゐてくれる者もあります。御言葉に背くやうですが、今暫くこゝで奮闘して見ますから、どうか長い眼で見えて下さいます』

『うん、さうだな。これだけ苦勞の理が現れて來たんだもの。もう一つ頑張つて見い』

私はホツと救はれたやうな思ひがした。同時に石に嚙り附いてもやらねばならんと思つた。

私は會長様に絶対服従の信念で通つて來た。さうして今回初めて會長様の温かい親心よりの御言葉にしたがはなかつたのである。親に逆つた理は私が負はねばならない。私は食事するのも忘れて頑張つた。お蔭で信者は益々増加し、教會に盡力してくれる人々も出來て來た。

私は傳道の方面ばかりでなく、その頑張りを教會維持の方面にも現した。私は會長様から、こゝまで御守護頂くのは並大抵ではなかつたらう、と讃めて頂いたのがどんなにうれしかつたか。私は何だか受けた御恩のほんの僅か／＼お報い出來たやうな氣がした。

と同時に、もつとお報いしなければと考へた。

丁度、信者の子弟から日本語學校の設立を勧められてゐた。よし、日語學校を設立してその収入で傳道所を維持し、長い間かけて頂いた傳道補助費支給の御恩に報いようと決心し、早速その開設に取懸つた。

そして開設と同時に傳道補助費をお断り申上げた。

私は會長様の御言葉に背いた。滿洲行を断つたが、それによつて一つの飛躍をさして頂けたのである。會長様によつて救はれたのである。

同じ年、會長様は又北京に巡教して下され、私の傳道所へお泊りになつた。その時。

『佐藤、お前の傳道所も、だんく信者が殖えて来て盛大になつて来たなあ。もうこれなら大丈夫だ。一つ大教會から五千圓程金を出してやるから、家一軒買つて教會設置をさして貰へ。お前のところは京城よりも、上海よりも、先に布教に掛つてゐるから、そちらよりも先に教會設置をさしてやり度い。それが順序だ。だから、出来るだけ早く適當な家を探して大教會へいつて来い。すぐ金を送つてやるから』

有難いお言葉である。どこに、こんなにまで傳道者の仕事を理解し、援助して

下さる理の親があるものか。私は感激で胸が一杯になつた。

五千圓。大した金である。三十元と餘裕の金のない吾々の現状である。早速、有難うございますとお請けしたい。

しかし私は一步退いて靜かに考へた。そして御返事した。

『會長様の今のお言葉は、私として身に餘る有難いお言葉ですが、もう暫く私に苦勞の道を通らして下さい。もう暫く目を瞑つて私の道を見てみて下さい。私は今、中國人にひのきしんの精神、即ち犠牲的精神を一心になつて仕込んでゐる最中ですから。これが中國民族には一番缺けた精神ですから』

私はこんなにお断りの返事をした。

私は親の理に逆つたかも知れん、會長様に不快な氣持を起さしたかも知れん、餘り大きな口を敲き過ぎたかも知れん。

しかし、私は會長様のお言葉を通じて、神様の思召の片鱗が窺へたやうな氣が

して非常にうれしかった。

曉近し。もう間もなく支那傳道の夜は明ける。往還の大道が長々と闇の中に私には感じ取られたやうな気がしたから。

それから一年後、果せる哉、傳道所擴張の話が信者間に勃々として起つて来た。そしてそれは終に一轉して土地買收の話に轉化した。そして間もなく北京の一等地區の繁華街に現實として表れた。

土地買收完了後は、神殿建築の議となり、進んで教會設置となり、大教會の親の力をお借りせずに、信者一同の熱誠によつて、崇文教會が出来上つた。

一時は表面は親の理に逆つたかの様であるが、私は海外傳道者だからとて特に愛し、憐みをかけて下さる親心に甘えてはならぬといふ信念を絶へず持つてゐたから、親よりの温かいお言葉こそそのまゝ受け入れなかつたけれども、心では尙一そう感喜感激して親の理にぞつた。これが神様の思召に適つてゐたのであら

う。會長様から仰有つて頂いた五千圓の家は、神様から二萬圓の教會として與へられたのである。私は天の理の不思議さに今更乍ら感動させられたのであつた。私の家は以前から、私達の周圍に起る一切の事情は總てこれを會長様に報告して、その御指圖を仰がなければ實行しないと云ふ信仰で培はれて来た。私の両親は勿論私もこの信仰で進んで来た。どんなむづかしいことでも、至難なことも、會長様から許されたことは必ず成功し、圓滿なる結果を齎した。日語學校もさうである。幼稚園もさうである。教會もさうした親の理に強く繋がれて来た結果、遂に一人前の成人をなし遂げられたのである。

親に繋がる。親の理を頂く。これこそ事物の發展する原理であらう。

支那事變を契機として教會は素晴らしい躍進をつづけた。道は若草のやうにグン／＼伸びた。一人前の姿と力とを備へて順調に發展した。

私は愈々恩返しの時機が来てゐることを悟つた。

私は長い間、親の慈乳によつて、今日までの道を辿つて来たのである。五ヶ年間の長い年月、甘いお乳によつて育てゝもらったのである。

その御恩に對しての御禮心の一端として、私は私の教會に河原町大教會北支出張所を併置して頂き、中國傳道を志す勇敢なる同志の指導育成の重任を引受けさせて頂いた。

中國傳道を志す若人よ、何人でも來い、私の教會を足場として、中國語を習得し、中國事情に通じ、さうして中國の各地で、中國人と共に祈りの生活に飛び込んでくれ。必要ならば私の教會の信者も分けよう。傳道費も支給しよう。さうしてせめても親から頂いた限りなき御恩の一端に報いたいと念願してゐる。

昭和十五年八月、教會の基礎が固り、御分靈鎮座奉告祭を勤めさせて頂いた。

新しい教會を建築してから、未だ一度も會長様、奥様に御巡教頂いたことがない。豫々『お前のところの奉告祭には是非行く』と仰せ下さつたそのお言葉を樂

しみに、會長様の御都合のつく時を待つて、いよく今回こそはと私は日本に歸つて會長様に切願した。だが總務部長として御本部の御用が御多端で、どうしても手が開かない。

『今丁度本部は制度革新で、どんなにしても手が開かん。前から話してゐた通り行つてやりたい心は十二分に持つてゐるが、どうしても駄目だ。儂の代理に家内をやるから、それで辛抱してくれ。いづれ創立五周年とか十周年とかの祝典を擧げるだらうから、その時はきつと行く。お前としつかり約束して置く』

私は會長様をお迎へするといつて狂喜してゐる信者達の氣持をかへり見ると、どうしても一沫の淋しさと物足りなさを感じたが、これが國家非常時の姿であると考へて、空しく歸つた。

奉告祭には奥様始め大教會の先生方の御臨席を仰いで盛大に舉行された。式典を終つて、私は早速電報紙を取上げた。そして、

今無事盛大に奉告祭を終る。永年の御薫陶を深謝すと會長様宛の謝電を打つた。

私は十月、大祭を兼ねて、奉告祭の御禮に歸國した。會長様は私の顔を見るなり、

『佐藤、ようやつたな。家内から盛大だつた様子を聞かして貰つて、儂はよろこんでゐる。撓まずしつかりやれよ』

私は只これだけで満足した。會長様から頂いた數々の御高恩の一端に報いられたやうな、心からのうれしさを沁々と感じた。

『會長様、有難うございます。御蔭で盛大に勤めさせて頂きました。只、會長様に御出で頂けなかつたのが、何より残念です』

『うん今度はきつと行くよ』

私は再び固くお約束して北京へ歸つた。

ところがその翌年、一月二日の日、大教會から航空便を受取つた。開いて見ると、會長様御病氣につき、各教會において御平癒の御願ひ勤めを勤めるやうとの通知であつた。

私は驚いた。早速教會全員を集めてお願い勤めを勤めた。その後引續いて毎日勤めた。

ところが一月十日、午後一時半頃、會長様御歸幽の飛電に接した。

私は夢にも思はんことであつた。旅行證明のため警察へ走りビュローへ走り、やつと切符を手に入れ、その日の午後五時半の『興亞』で日本へ走つた。

私を支へて下さつた大支柱は大きな音を立て、倒れたのである。傳道の當初から種々の反對を押し切り、攻撃を破り、陰になり陽になつて、私を守り私を助けて中國傳道を遂行さして下さつた恩人である。

支へる柱
河原町大教會の海外に伏せた赫々たる大きな理を、全部私に譲り、つたなき私

をやうやく今日あらしめて下さつた代へ難き恩師である。

私とのあの約束、きつと行くと仰せられたあの堅き約束も、終に果されずに煙と消えた。

私は狂はしいやうな氣持で、恩師の柩前に馳け附けた。莊嚴に飾られた靈前に跪坐した時は、それがどうしても他の人のやうに思へて、何の感懷も起らなかつたが、居間に奥様を訪ね、奥様から、

『會長様は貴方のことを、どれだけよろこんでゐられたか知れんで……』
といはれて、初めて熱い涙がほとばしり出た。

私は其の他、傳道廳、大教會を始め多くの支柱によつて支へられて來た。私の中國傳道は決して私達のみ力で築き上げられたものではない。

そして現在も、將來も、この支柱によつて支へられて行くであらう。
支柱の力。これこそ中國傳道を何時の日にか完成せしめる大なる力である。

昭和十六年十二月五日印刷
昭和十六年十二月十日發行

定價 貳圓五拾錢

る祈に土黄

著者 北京市崇文門内大街七十五號
佐藤 軍紀

印刷所 奈良縣丹波市町川原城三〇七
天理時報社

右代表者 岡島善次
日本出版文化協會會員登録番號二一九五〇一

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地
日本出版配給株式會社

終

